



Title	漢學研究法
Author(s)	武内, 義雄
Citation	懷徳. 1929, 7, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德 第七號

藝文

漢學研究法

武 内 義 雄

本篇は東北帝國大學教授武内文學博士が前年某講習會に於て講演せられたるを其の會に於て概要を筆記したるものなるが、斯學に従事するものに取りて有益のものなれば、今回同博士に請うて此に收むることとせり（編者謹識）

一、叙 説

題して漢學研究法と云ふ、所謂漢學に二種の意義あり。第一は宋學に對する漢學にして、第二は和學に對する漢學なり。

第一義に於ける漢學は經學に於ける學派を區別する語にして、清朝學者の常に用ふるところ、其一例は江藩の漢學師承記と宋學淵源記とに於て之を見る、即漢學師承記は漢時代の經學を繼承する學者の傳記にして宋學淵源記には程朱學派の學者の傳を記す。蓋し漢は秦滅學の後を承けて文藝復興に力を注ぎしも、其初は僅かに前代遺老の口傳を承繼せるにすぎず。然るに中頃に及び師傳の流別顯著となり、加ふるに孔壁の古文經等發掘せられて舊來の傳説に妄従すること能はざるに至り、茲に異派を折衷して一家となし、又文字の考究により是非を決定せんとする傾向を生じたり。其折衷派の大家は後漢の鄭玄字は康成にして文字研究の泰斗は後

漢の許慎字は叔重なり。其後三國六朝を経て學風の推移なきにあらざるも兩漢より唐初五經正義の編纂せらるゝに至るまで許鄭の學猶存するあり。然るに五代を経て宋に入るに及びて經學は一大變して舊來の師說に疑義を挿み、苟くも自己の理性に照して不合理と思はるゝ點は一々之を抉摘して新說を樹立するもの多くなれり。歐陽修が周易童子問を著して從來孔子の作と解せられたる易の十翼を疑ひ、朱子が詩經の新注を公にして古來說詩者の金科玉條たりし詩序を排斥せるなどは此時代思潮を代表するものと云ふべく殊に宋の陸象山明の王陽明が主觀的內察を主として經傳を輕視せる如きは愈出てゝ愈甚しきものと云ふべし。

清の興るや朝廷の方針としては朱子學を尊崇せるが民間殊に楊子江附近の地方に於て崛起せる學者の多くは宋明の學風に反抗して兩漢の學を唱導し茲に漢學と宋學の對立を見るに至れり。試に漢學を簡單に説明すれば「漢學は兩漢の學許鄭の說を尙び文献の研究に重きを置けるに反し、宋學は宋明の大儒朱王の風を敬して主觀的考察を重んじて傳承的文献を輕んずる傾きあり」と云ふを得べし。然り而して本題目に所謂漢學はこの宋學に對する漢學の義にあらずして第二義に於ける漢學也。

第二義に於ける漢學は本邦學者の命名せる所にして漢土の文献を基礎とする學問を總稱するもの、輒近支那人は之を國學と呼び歐洲の東洋學者は之を支那學と稱す。此の意味に於ける漢學には第一義に於ける漢學も宋學も共に包含せらるゝは勿論、獨り經學のみならず支那の文献を資料として講究せらるべき凡ての學問を包含するものなり。

從來の漢學者は概して治國修身を目的として學問を政治道德の具と思惟せるもの多し、從て其所謂研究は一派の學說を墨守して異派を排斥するを維れつとむるが如く感ぜらるゝものあり。吾人の所謂研究は之と異にして凡て文献を公平に判斷して、作者自身の本意を探求し著作當時の社會に對する關係を考へ其の結果を

積重して發達の歴史を組織せんとするにあり。從て研究者の趣味が文學的方面にあれば其結果は文學史となるべく、哲學的方面に存すれば哲學史となるべく、其他宗教史、法制史、美術史、文化史等其研究の方面は種々に區分せらるべきも、其研究的態度は自ら共通せらるべし。吾人が題して漢學研究法と云へるはこの共通なる研究の態度につきて略言せんとするものなり。

二、眞僞の鑒別

歴史的研究法の第一要件は材料の審定にあり。由來支那の文献には僞作のもの多く、清儒張之洞が輶軒語に於て

一分眞僞、而古書去其半、一分瑕瑜、而列朝書去其十之八九、

と云へるはやゝ過言の嫌なきにあらざるも、僞作の多き事は否定すべからず。從て凡ての材料を輕信するときは時代錯誤の弊に陥りて正當なる判斷を下し能はざるに至るべし。是れ眞僞の鑒別が歴史的研究の第一要件たる所以也。

支那に於ける文献の僞作は其僞作の動機により略次の五類に分つことを得

一、支那人の尙古癖によるもの

二、學派の爭に原因するもの

三、利欲の爲にせらるゝもの

四、他人をあざむくを快とするもの

五、作者が名を隠くせる爲めに誤らるゝもの

第一類實例

イ、漢書藝文志に「神農二十篇」を録し注して「六國時、諸子疾時怠於農業道耕農事、託之神農、」と云ふ。其書名より判斷すれば神農の作の如く見ゆるも其注文により考ふれば戰國の時の著作にして作者が其説を重からしめんが爲に故らに神農の名に託したるものと思はる。孟子滕文公章句上の「有爲神農之言者許行」と云へる一節を思ひ合すに、此種依託の書は略孟子の頃許行の徒の手になれるものなるが如し。

ロ、又漢書藝文志に

黃帝君臣十篇 起六國時、與老子相似也

黃帝說四十篇 迂誕依託

雜黃帝五十八篇 六國時賢者所作

とある亦其注文によれば黃帝の作にあらずして戰國の作なるを想像すべし、而して黃帝君臣十篇が老子と相似と云ひ、莊子列子中に黃帝の言を引けるなど合せ考ふるときは其作者は老莊系統の學者なるべし。淮南子に「世俗之人多尊古而賤今、故爲道者必託之於神農黃帝而後入說」と記せるは此等の著作が支那人の尙古癖に本く僞作なることを證明するものなり。

第二類の實例

漢書藝文志に孔子家語二十七篇を録すれども今存する所の孔子家語は魏の王肅が注する所にして十卷四十四篇に分ち其篇數漢の時のものと合せず、且つ唐の顏師古は漢書に録する二十七篇は今所有の家語に非ずと云ひ、禮記の樂記疏に「馬昭曰家語王肅所僧加」と云ひ又王制疏に「家語先儒以爲肅之所作未足可信」と云へるなど合せ考ふるに今の家語は漢時代のものにあらずして王肅の僞作なるが如く判斷せらる。而し

て清儒范家相は家語正譌を孫志祖は家語疏證を著して今本家語を研究し、其僞作なるを證明してより殆んど學界の定説となれり。王肅の著述に聖證論と云ふあり、この書は家語を以て證據となし鄭玄の説を駁せるものにして王肅が家語を僞作せるは之に據りて鄭學の徒を壓するを目的とせるものなれば、家語の僞作は學派の争に原因するものなるを知る。

第三類の實例

支那は革命の多き國にして戰亂に遭ふごとに文献の滅亡するもの多く、而して新興の王朝は天下統一の後、一たび散佚せる書籍を集むるに力を盡すを例とす。南北分立の後を承けて天下を一統せる隋の如きも其例にもれず。隋書經籍志に當時蒐書の事ありしを記して曰く隋開皇三年、秘書監牛宏表請、分遣使人、搜訪異本、每書一卷、賞絹一匹、

と、北史劉炫傳又曰く

劉炫字光伯、河間景城人……牛宏購求天下遺逸之書、炫遂僞造百餘卷、題爲連山易魯、史記等、錄上送官、取賞而去、

と、彼と此とを對照して考ふるに劉炫は取賞の爲めに古書を僞作せしものなることを知るべし。但炫の僞作せる連山易魯史記は今傳らずして僞作の實證を挙げがたきも、我國に存する古文孝經が其時僞作せられたるものの如く思考せらる。近藤正齋右文故事に足利學校現存眞本を錄せる中に古文孝經の一條あり、曰く守重按三代實錄清和天皇貞觀二年十月十六日制、此間學令孔鄭二注爲教授正業、厥（然の誤か）其學徒相沿盛行於世者、安國之注劉炫之義也、今按大唐玄宗開元十年撰御注孝經、作新疏三卷以爲……安國之本梁亂而亡、今之所傳、出自劉炫云々

と、今足利學校眞本によりて上梓せる版本に孔安國の序下に劉炫の疏の存するより考ふるにこの本は梁胤の後劉炫が僞作せるものと思はる。古文孝經の後の刻本は皆劉炫の疏を去りて僞孔序のみを載するが故に近世支那の學者は之を日本の僞作とするも實は劉炫の僞作にして本邦人の僞作にあらず。

第四類の實例

明の嘉靖中方坊と云ふ人あり、其家は宋の元祐以來名人相つぎ出で、藏書の豐なること當代第一と稱せられし程なるが、坊は其先世清敏が秘府に得し所なりと稱して河圖石本、魯詩石本、大學石本を僞造し、又其先世豐慶が譯館に得し所なりとて朝鮮尙書日本尙書を僞作せること全祖望の天一閣藏書記に見ゆ。就中大學石本は特に有名なるものにて、其本、修身章に於て論語「顏淵問仁、子曰非禮勿視」等の廿二字插入し且其末尾に賈逵の言として「孔伋窮居於宋懼聖道之不明、乃作大學以經之、中庸以緯之」の句を附刻す。由來大學は禮記中の一篇にして作者不詳のものなるが、此の石本によれば中庸と同じく子思の作となる然れども、此本は明かに坊の僞作にして信するに足らず。清儒其僞を論證せるもの多く毛奇齡大學證文尤も詳密なり。

第五類の實例

明胡應麟筆叢三十二 王銍の言ふ引きて曰く

魏泰場屋不得志、喜僞作他人著書、如志怪集括異志倦游錄假武人張師正僞不能自抑出姓名、作東軒錄、皆用私喜怒詆讎前人、最後作碧雲騭、議及范仲淹、而天下駭然不服矣

と、蓋し志怪集括異志倦游錄は張師正に托し碧雲騭は梅堯臣に托して作るものにして、其記事妄に前人をそしめるが故に自ら名を著する欲せざりしなり。

僞作の起るは種々複雑なる事情ありて一概に論す可らず。右五類の如きも其尤も習見する例を挙げしのみにして、此他或は書賈が名人の名をかりて出版せるもの、後人が前人の著書を竊めるもの等も少からず。

要之支那人の文献には僞作の書多くして輕信するときは、思ひも寄らぬ錯誤を來すこと多し。故に歴史的研究法の第一要件として眞僞の鑒別を嚴にせざる可らず。眞僞鑒別の方法としては胡應麟筆叢の説甚だ注目すべし。試に之を引用すれば左の如し。

凡覈僞書之道 (一) 覈之七略以觀其源、(二) 覈之群志以觀其緒、(三) 覈之並世之言以觀其稱、(四) 覈之異世之言以觀其述、(五) 覈之友以觀其體、(六) 覈之事以觀其時、(七) 覈之撰者以觀其託、(八) 覈之傳者以觀其人、覈茲八者而古今贋籍亡隱情矣

胡氏の八項中第一項に所謂七略とは漢の劉歆の七略を指す也。史を按するに秦の始皇は言論を抑壓せんが爲めに民間に書を貯藏することを禁じたりしが漢の惠帝は挾書の令を除き次で武帝は藏書の策を建て寫書の官を置きて文籍の蒐輯を計り更に降て成帝の代には朝廷諸臣に命じて秘府の書を校訂せしめ劉向をして事を督せしむ、劉向は即一書の校定終る毎に其篇目を條し其指意を撮り解題を作りて之を奏上せり、此解題を集めて一書とせるものは即「劉向別錄」なり。後劉向死するに及び、哀帝は其子劉歆をして父業をつかしむ。歆は是に於て群書を綜括して目錄を作り之を七略と名く。七略は支那に於ける目錄の權輿にして、現行書籍が七略に著録せられあるや否やを検することによりて其書が漢以前よりありしものなるや或は後世の作なるやを判斷し得らるゝ也。尤も劉歆の七略は既に散佚して傳らざれば今之を検することは不可能なれども班固の漢書藝文志は七略に本き多少取捨を加へたるものなれば、漢志を検することにより七略を検すると略同じ効果を擧げ得る也。

第二項に群志に覈すとあるは、漢書藝文志を始として、隋書に經籍志あり、舊唐書に經籍志あり、新唐書に藝文志あり、宋史に藝文志あり、明史に經籍志ありて、歷朝正史の中に當時朝廷の書庫に存せる書籍の目錄を存し、又宋以後にありては個人の藏書目錄の類の今に存するもの多ければ此等に對照することによりて、書籍の存佚卷帙の變遷を知ることを得べく、之により書籍の眞僞を決定する手がゝりとなることある也。

要之第一項と二項とは目錄を以て眞僞決定の標準となすことにして、支那文獻の批判に於ける第一要件也。この目錄を標準として文獻の批判をなす方法を支那の學者は目錄學と呼ぶ。清儒王鳴盛は目錄之學、學中第一緊要之事とまで云へる程にて支那の學問に志すものは、先づ目錄の學に通ぜざるべからず。

第三項覈之並世之言以觀其稱とは眞僞の疑はしき書物を判斷するに當り其書中に用られたる文句が果して其當時の用語に合するか否やを検する也。凡そ各時代にはその時代特有の語ありて兩漢の語と唐宋の語とは自ら異なれりもし漢代の書と銘するものにして唐宋の用語あればその書は疑ふべき也。具體的の一例を舉れば尙書五子之歌の篇中に「鬱陶乎予心」と云へる句ありて孔傳には「鬱陶言哀思也」と注す。然るに爾雅には「鬱陶喜也」と云ひ郭璞は孟子の「鬱陶思君」の句を引きて亦喜悅の意とせり。是れ鬱陶は古は喜悅の義に用ゐられし證にして之を哀思の義に用られしは、魏晉以後のことに屬す。從て五子の歌に哀思の義に用ゐたるはそが魏晉以後の僞作なるを證すべき也。

第四項 覈之異世之言以觀其述とは他書を引用せられたる句と一致するや否やによりて眞僞を判斷する也。

第五項は其文體によりて判斷する方法なり。凡文體は時代と共に變遷するものにして、後世の人が如何に古體を模倣するも其間自ら後世の格の現はるゝものなり。例は古文尙書は、古書の文句を綴り合せて僞作せるものなれども、其中に六朝駢文の臭氣交りて僞作證自ら現れ居るが如し。

第六項は其記事内容に後世のことあり、又は實際と違ふことあれば其書は疑ふべきなるをいふ也。

第七項と八項とは 其撰者と傳者によりて考ふるものにして、其傳者が偽作の癖ある人なれば其書は疑ふべく、其撰者が有名なる人にして而も其人の言ふまじきことを記するあれば假託なるを推測すべきを云ふ也。例へば碧雲騭は梅堯臣の撰とするも范仲淹を非議するは堯臣の言とは思惟しがたく、その假託なるを想像せしめ、關尹子は徐藏が孫定の處より得たりと云ふより徐藏か孫定かの偽作なるべしとせらるゝが如きを云ふ也。

以上八項は眞僞の鑒別につきて注意すべき點なれども之によりて眞僞の分別するは初學の人の容易に企て及ぶ所にあらず。初學の士は宜しく前輩が研究せる結果を熟讀玩味して其要を會得し更に進んで先人未到の原野を開拓すべし。先進の眞僞鑒別を見るに尤も都合よきは四庫全書提要にして初學の徒は先づ此書を熟讀して途逕を定むるを可とす。

三、校 讐

眞僞の鑒別し終れば須らく僞書をすて、眞書を講究せざる可らず。然れども眞書の内にも時代に新舊の別ありて、其古きは幾千年の年所を経幾百回の轉寫翻刻をへたるもの少からず。此種古典にありて誤脱錯簡の存するは寧ろ自然の結果にして、之を研究するには先づ異本を對校して錯誤を訂正せざる可らず。この異本の對校を校讐と稱す。

校讐の業は易きに似て實は難し。試に校讐に對する用意を條舉せん。

一、廣く異本を輯むべし。

清朝學術の黃金時代とも云はるゝ乾隆嘉慶の交にありて學者は兢て校讐の事に従へり、而して當時の校讐を刺戟し助長せるは異本の蒐集なり。明末より清初にかけて書籍の蒐集を以て畢生の事業となせる人出で、遂に一時の風尚をなし、乾嘉の交に至りて其全盛期を呈せり。此等收藏家の傳記逸事は葉昌議の藏書紀事詩に載録せらる。而してこの中尤も注目すべきは吳縣の黃丕烈(字は蕘圃)也。蕘圃は嘗て明末の收藏家汲古閣の北宋本陶詩と別に南宋本陶詠とを得て、其居を陶々室と名け、後宋版一百部を藏するに至りて百宋一廬と呼べり。彼の友人には錢竹汀顧千里等の學匠ありて蕘圃の書を校讐して跋尾札記を作り古版本の重んずべき所以を闡明し、蕘圃も亦其收藏中の尤物を選びて士禮居叢書等を刊行して學界に貢獻せり。此に於て畢沅盧文詒の徒接踵して興り、古典を校刊して所謂乾嘉學術の盛を鳴らすに至れり。是れ古版本の蒐集が校讐の學を助成せる實例なり。然れども乾嘉學者が校讐に用ゐたる資料は多くは宋元以後の版本にして隋唐の古寫本等に及ばず。此は支那は戰亂多くして古寫本の散亡せるが爲に由る。之に反して我國に遺隋遺唐の使が將來せる隋唐の舊帙又は其系統に屬せる轉寫本比較的によく存して乾嘉學匠が見る能はざりし尤物も少からず。曩には享保中山井昇は足利學校に儲藏せる古版古寫本に本きて七經孟子考文を著し、次て其本支那に舶送せられて、乾隆の四庫全書中に收録せられ、嘉慶中阮元は楊州江氏讀書樓に於て此本を讀み、其中引く古本が隋唐の面目を存するものあるを喜びて之を翻刻せり。後阮元が十三經注疏校勘記を作るに至れるは蓋し此書に刺戟せられたる點多かるべし。この一例によりて本邦傳來の古寫本が校讐に貴重なる材料たるを知るべし。又近年西洋人によりて中央亞細亞の探訪が行はれて支那古典の發見せられたるもの多し、就中尤も注意すべきは燉煌本の出現也。燉煌は支那より中央亞細亞をへて印度及西洋に出る要路に當り唐の頃には世界文化の會集點に當るを以て此地に唐代文献の貴重なるもの殘れるは偶然にあらず。此地に殘れる古典の多くは英の

スタイン佛のペリオにより彼土に持ち去られ大英博物館、佛國國民圖書館に寶藏せられ又其一部分は北京京師圖書館及支那個人の有に歸せるものあり。此等は皆唐以前の舊本にして之を日本の古寫本に比較するときには日本の古寫本の貴重なる所以を證明するに足るものあり。又日本にもなき材料も多し。従て今後校讐の志を立つるものは廣く材料を求めざる可らず。

二、目錄學に通ずべし。

材料の蒐輯に手懸りとなるは目錄也。支那板本の珍らしきものは彼土學士收藏家の藏書目錄によりて方針を定め得。支那人の目錄は近年日本の圖書館等にて作る形式上の目錄とは異にして其本の内容外形に亘り詳細なる研究が附記せられあり。此れ等目錄書の主なるものは天錄琳瑯書目、讀書敏求記、士禮居藏書題跋記、鐵琴銅劍樓書目、楹書偶錄、韻宋樓藏書志、儀顧堂題跋、善本書寶藏書志、藝風堂藏書志等あり勿論此等目錄に記載せられたる書籍は天下の孤本にして容易に目堵しがたけれども近年上海等にて印行せらるゝ石印本珂羅板本中には此等孤本を寫真板上に上せるもの少からざれば此等目錄に通じて上海書肆の出版に注意する要あり又此等珍本が鎌倉以後禪僧により日本に輸入せられたるものありて、森立之の經籍訪古志により其所在を知り得るものあり。殊に陸心源の韻宋樓の舊藏書は今東京岩崎氏の靜嘉堂の有に歸し居れば就て見るを得べし。日本傳來の古本につきては近藤正齊の古文故事市野迷庵の讀書指南森立之の經籍訪古志、楊守敬の日本訪書志、留眞譜正續篇、和田氏の訪書餘錄、雲村文庫目錄、及び圖書館、內閣文庫、南葵文庫等來歴ある圖書館の目錄を披見すれば大體の方針は明になるべし。燉煌本の目錄は部分的に雜誌等に紹介せられたるものあり、然れども余未だ其詳細を知らず但天津羅振玉の手によりて影印せられたるもの、中に重要な材料をふくむ。

三、書物の系統を正すべし。

校讐の材料は廣くして多きを尙ぶ。然れども誤字錯亂の處は多數決を以て定むべからず。同じ系統の諸板は如何に數多くとも同一の價值のみ。從て校讐に従事するには諸板本諸寫本の系統を正して、其中の代表的のものを取り、斯くして選擇せられたる三四本の校勘は無方針に集められたる數十種材料にまさる。此の系統を正すは亦目錄の書に依るべし。前人の記述なきものは自ら研究すべし。

四、底本の選定を嚴にすべし。

校讐を行ふに當りては蒐められたる異本の一を選びて底本とすべし。この底本の選定は必ずしも古きものによるべきにあらず、例ば元板と明板とある場合元板が必ずしも善本にあらず、明版中には翻宋本ありて粗末なる元板に勝ること數等なるものあり。又日本徳川の初に活字を以て出版せられたる版本の内には本邦に傳れる古鈔本に根柢するものありて年代より云へば宋元版に晚るゝも、其系統より考ふれば更に古き材料也、從て底本を定るに當り必ずしも出版の前後によりて價值を問ふべからず。定本の撰定は書物の系統を考へ得れば自ら解決すべし。

五、妄に改竄することをいましむ。

既に底本を定むれば妄に改竄すべからず、必ず一定の方針を定めて事に従ふべし。即底本は一字一畫も改めず之に従ふとすれば、其異同ある處は別に札記を作りて其異同を列舉して甲乙を論定すべし。もし底本の誤字を改めて正につくとすれば、原本の字を注記して改作せる理由を明記すべし。

以上五項に注意して校讐に従ふ時は古人が誤本に據りて臆說せるところを發見すること多し。校讐は古書を讀む第一階梯也。然れども其業たるや言ふに易く行ふに難し。多くの時間と資力とを有して且つ勞力を吝まざる人にして、即よく此業に従ふを得べし。學者もし自らこの事に従ふ能はざれば先づ先輩の努力に成れる

結果に依るべし。經を讀むには阮元の十三經注疏によるが可し、子書は浙江局刻の二十二子全書稍可、史部及集部の書一々列舉しがたし、張子洞書目答問、莫友芝邵亭知見傳本書目によりて其津を問ふべし、漢文大系國字解等を徵引する研究書等は砂上に築かれたる樓閣、否バラツクのみ。

四、通 訓 詁

既に讀書の第一階梯が校讐にあることを述べたれば茲に第二階段を説くべし。讀書の第二階は訓詁に通ずるにあり。訓詁に通ずるとは文字に通ずる也。

凡そ漢字には三方面あり、字義字音字形是れ也。而して此三方面を攻究するにはそれぞれ特別の材料によらざるべからず。

一、字形の研究は説文を以て根抵とすべしとは漢學者の恆言也。

余は寧ろ説文を階梯とすべしと云はんとす。説文は後漢の許慎が撰する所にして凡て十四篇五百四十部に分ちて九千三百五十三字を排列し、文字製作の本旨を明にして字義を説明せるもの詳しく云へば説文解字と云ふべし。此書今傳はるもの二種あり一は徐鉉の校定本にして二は徐鍇の校定本也、鍇は鉉の弟故に學者鉉の校定本を呼で大徐本と云ひ鍇の書を呼んで小徐本と稱す。大徐本は十四篇及叙を分て十五卷となし小徐本は之を三十卷に分ち更に部叙通論等十篇を加へて四十卷となす。今二本を比較するに二徐の附加する所各異なるは勿論許慎の説と考ふべき部分にも出入ありて一致せず。同治中張廉臣が藏せる説文本部の唐寫殘卷あり、此本唐の穆宗頃の鈔寫にかゝり二徐校本の出づる前にあり、今この殘本の影刻本を取りて二徐本に對校するに其小徐本と異なるもの大徐本と合し大徐本と合せざるもの小徐本と一致するものありて、二徐各長短あり、

説文研究に従はんとすれば必ず二徐を對讀して潜心すべき也。却説、説文原序によるに、周の宣王太史籀と云へる人大篆十五篇（一名史籀篇）を著し、後に秦の李斯は倉頡篇一篇、趙高は爰歷篇一卷、胡毋敬は博學篇一篇を著して大篆を簡略にして小篆となせるが、許慎は其小篆に本き史籀を參酌し、又當時行はれたる古文經傳の文字と通人の説をも取捨して此書を著すと云へり。この序によれば小篆即秦篆は大篆即史籀より出しものにして、史籀は即周代の文字なるが如し。然れども秦大良造鞅銅量は秦孝公十六年の作に係りて其文全く小篆に同じく、又詛楚文の銘文も大底小篆に一致すれども其中間々説文所引籀文に合するものありて籀文は寧ろ秦の文字なるが如く思はるゝ點あり。又籀文に類する石刻に石鼓文あり。著錄家相傳へて周宣王が岐陽に獵せる時のものなりと云ふも、鄭樵、楊慎、全祖望は之を秦のものとなせり、其文字が秦篆と相似て籀文にも相似たるは籀文と小篆との關係を説明すべき材料にして、もし全祖望諸人の考が認めらるゝときは史籀は秦の古き文字と決すべき也。石鼓文を周の宣王のときのものとして云ふ有力なる根據は史籀篇の作者を同宣王太史籀の作と云ふによるなれども太史籀てふ人の事蹟を記するもの絶て見當らず且つ説文序に

尉律（漢律の名）學僮十七已上試諷籀書九千字乃得爲吏

とありて、籀文九千字を解するもの吏たるを得ると解せらるゝも、漢の時代に吏となる要件が籀文九千字を知るにありとするは迂也。漢書藝文志には同じことを記して「能諷書九千字」に作る。漢代官吏登用法としては漢書の記事正鵠を得たるを覺ゆ。然らば説文は書の上籀文を衍するか、否是れ籀文は説文に讀也と注し「諷籀書九千字」は當に書九千字を諷籀するものと讀むべき也。果して然らば史籀篇の籀字は太史の名にあらず想ふに其書の首が「史籀、」の句に初りし爲めに呼ばれたる名なること凡章爰歷及び急就章の例に照して知るべし。蓋し籀文と小篆とは共に秦の文字にして前者は後者より古き形なるべし。

之に反して説文が史籀とならべ引ける古文は漢の頃孔子の舊宅中より出でたる儒教の經傳に用られたる文字にして、そは魯國に通用せられたる戰國時代の文字なるべし。従て説文は秦地方の文字と魯地方の文字とによりて形より推して文字の本義を説明せるものなり。

然るに説文の序に

孔子書六經、左邱明述春秋傳、皆以古文、厥意可得而說、其後諸侯力政、不統於王、惡禮樂之害已而皆去其典籍、分爲七國、田疇異晦、車涂異軌……言語異聲、文字異形、秦始皇帝初兼天下丞相李斯乃奏同之

と云へる一段ありて戰國の頃七國各文字を異にしたる如く、現今傳はれる金文中には形態の異なるもの少からず。従て説文の採れる材料は猶以て完全を望むべからず。字形の研究は説文を階梯として更に金文に進み金文より更に甲文に進まざるべからず。吾人が説文を根抵とせず階梯とすべしと云ふは此の點を云ふ也。

金文とは周代及周以前にありて鐘鼎彝器に刻せられたる銘文にて許慎説文序にも

郡國亦往々於山川就鼎彝、其銘即前代之古文、皆自相似、

と見たれば漢の頃より既に注意せられたるは否むべからず。然れども之が多く蒐輯せらるゝに至りしは宋以後の事にて、其銘文の研究が特に發達せるは清代也。其銘文の研究も最初の頃は説文によりて之を讀むことが主なるも漸次發達して遂に金文を集めて綜合歸納し其結果によりて説文の誤を正し足らざるを補ふに至れり。金文によりて説文を敷衍せるは莊述祖の説文古籀疏證を推すべく、金文中の文字を説文の順序に排纂せるものには吳大澂の説文古籀補あり。而して吳大澂には又字說と題する小著あり、其卷帙より云へば小著なれども其文字研究に貢獻せる點より考ふれば大著也。

甲文は殷代龜卜に供せられたる龜甲片及牛骨片の上に刻せられたる文字也。従前龜卜の法は周禮の中にも

記せられたるも其實證を得ざりしが光緒廿五年河南安陽縣西五里恆水の南に於て、多數の龜甲牛骨片を發掘せり。此等甲骨片は初め福山の王文敏の手に入り次て丹徒の劉鐵雲の手に歸し、劉鐵雲は之を搨拓して鐵雲藏龜を編印し世に公にせり。かくてこの甲骨文は廣く世人の知る所となり孫詒讓は之に據りて契文舉例てふ書を著し、次て羅振玉又之に潛心して殷墟書契前後編及考釋等の著を公にし羅氏の門人王國維も亦其研究を廣倉學叢叢書中に公にして學界を驚かせたり。此等研究の内に古代史研究に貢獻せる點も多けれども又文字の研究にも多大の寄與をなし、說文研究に新しき方面を開拓せり。

要之字形に本きて字義を研究するは說文を出發點として、金文甲文に溯源すべき也。說文研究は清儒段玉裁の說文解字注尤も可、金文の異字を輯めたるは吳大澂の古籀補あり、甲文を輯めたるものには王襄の簠室殷契類纂あり。

二、字義の研究は爾雅廣雅方言を主とすべし。

說文は文字の形體によりて製作當時の意義を説明せんとせるものなるは上述の如し。然れども文字の意義は時代の推移し地方の異なるにつれて轉化するものにして、說文のみにて文字の意義は盡されたりとは思ひがたし。是に於て說文を補ふに爾雅廣雅方言の研究を必要とする也。

爾雅は漢志には三卷二十篇と記するも今存する所は三卷十九篇のみ。詩周南關雎詁訓傳の正義に爾雅叙篇の一節を引くによつて考ふるに爾雅の舊本には叙篇のありしものゝ如く漢志に二十篇と記するは今本十九篇に叙篇を加へたるものなるべし。従て爾雅は漢の時既に存せしことは疑ふ可らず。魏の張揖「上廣雅表」によるに爾雅は最初唯一篇のみにして周公の所作なるが、今の爾雅は其後仲尼の増す所とも云ひ、或は子夏の益す所とも叔孫通沛郡梁文の補ふ所とも云ふといふ。而して隋の陸德明の經典釋文には周公の作る部分は即今

の釋詁一篇也と見ゆ。兩三年前内藤湖南先生は爾雅の新研究と題する一篇を雜誌支那學に載せて、爾雅に新舊の區別あることを論證せられたり、其說尤も傾聽するに足る。要するに其作者が何人なるは明證なきも一時の作にあらずして時代をふるに從つて増補せられしものなるは疑ふべからず。其製作の目的につきては詩經の正義に叙篇を引きて

釋詁釋言通古今之字、古與今異言也釋訓言形貌也

と云へば、釋詁釋言は時代によりて變化せる文字を通釋するを目的とせるものなるべし。その書名につきて考ふるに爾とは近也雅とは正也と注すれば爾雅の各時代の異言、諸地方の方言を集めて正言即標準語によりて説明せるものなるが如し、但其編纂が一時になれるものにあざれば、所謂標準語にも變遷あるべし。要之爾雅は各時代諸地方の特種の語を説明せるものにて、必ずしも其文字製作の本義に拘らず、時代々々に使用せられたる意義を解釋するもの、即說文は文字の本義を説明するに反し爾雅は派生義即轉義を説明するもの也。而して書籍の上に表れたる意義は本義よりも派生義の方多ければ爾雅の研究は殊に必要也。

古爾雅を注するもの無慮數十家今存するは郭璞注のみ。而して郭注の爲に疏をなすもの邢昺あるも猶完全なりと云ふを得ず。清儒之が研究に従事せるもの亦多し。就中尤も成效せるは邵晉涵の爾雅正義と郝懿行の爾雅義疏と也。爾雅研究に志あるものは宜しく邵郝二家の書より入るべし。

廣雅は爾雅の續編ともいふべし。古書の中に使用せられて而も爾雅にもれたる字義を掇拾して爾雅の内容を推廣する故に廣雅と呼ぶ。又博雅と呼べることもあり。清儒王念孫の廣雅疏證はこの書の最良注釋也。初め王念孫は爾雅の研究に潜心したりしが、郝氏の義疏成るを見て、更に自説を發表する要なきを思ひ、廣雅の研究に轉じて此書を成せる也。

方言は漢楊雄の作と傳ふ、其編纂の體裁は爾雅と相似たれども、方言は特に各字の習用せられた地方を明記する點異なれり。郭璞之を注し清儒此書の爲に專書をなすもの、戴震、錢繹、郭慶藩あり皆好參考書と云ふべし。若し爾雅の字を此書によりて地方に區分し更に殘されたる文字を時代の判明せる古典に徵證して何時頃の異言なるかを究明すれば、時代の判明せざる古典の時代を決定する標準ともなり得べし。

三、字音の研究は韻書による

文字の形と義とが時代によりて變する如く、字音も亦時代とともに變遷す。従つて古書を研究するには古音に通せざれば解を得ざること多し。而して清儒顧炎武の研究によれば支那の音は大略三期に區分し得。第一期は漢以前の音にして詩三百篇、及易、楚辭等の韻文によりて其時代の概略を推論し得る也。第二期は魏晉以後五代に至る間にして此間に成れる韻書は甚だ多し試に隋唐志等より此時代の韻書の目を舉れば

一、魏李登、聲類十卷

二、音集十卷

三、晉呂靜、韻集六卷

四、段宏、韻集八卷

五、北齊處概、修續音韵决疑十四卷、及音譜一卷

六、晉王延、文字音一卷

七、文章音韵一卷

八、王該五音韵五卷

九、釋靜英、韻英三卷

十、字書音同異一卷

十一、雜字音一卷

十二、叙同音義三卷

十三、借音字一卷

十四、音書考原一卷

十五、周研聲韻四十一卷、切韻序作周思言

十六、梁周顒、四聲切韻

十七、梁沈約、四聲譜

十八、王斌、四聲論

十九、張涼、四聲韻林二十八卷

二十、劉善經、四聲指歸一卷

廿一、夏侯詠、四聲韻略十三卷

切韻序作夏侯詒

廿二、北齊楊休之、韻略一卷

廿三、隋杜台卿、韻略

廿四、群玉韻典五卷

廿五、纂韻抄十卷

廿六、韻纂三十卷

以上二十六種は既に佚して唯其名を傳ふるに過ぎざれども又以て魏晉以後音韻研究の盛なりし一斑を窺ふに足る。而して隋に至り陸慈切韻五卷あり。呂靜の韻集、夏侯該の韻略陽休之韻略、周思言の音韻、李季節の音譜、杜台卿の韻略等を拆衷して其乖互を去れるもの實に魏晉以後音韻學を集大成せるものと云ふべし陸慈或は陸詞に作る、字は法言、陸爽の子也其書開皇初めに業を起し仁壽二年に訖る、唐の儀鳳二年長孫訥言は之に箋注を加へ、天寶十載孫愐は又此書に本づきて新に四萬二千八十三字を増益して廣切韻（略して廣韻とも云ひ又唐韻とも云ふ）を著し、降つて宋の景德四年には陳彭年等に命し大宋重修廣韻を編せしむ。蓋長孫訥言以下の三書は皆陸法言切韻に本くものにして其間多少の相違あらんも大體に於て同じ部分の下に文字を排纂せるものゝ如し。陸法言切韻原本は夙に佚して傳らず但源順の和名類聚抄及僧信瑞の淨土三部經音義中に引ける佚文を以て廣韻に比較すれば其大略を想像し得らる。長孫訥言の箋注本も孫愐の唐韻も既に完本を存せず。前者は近年敦煌より出でたる殘本三種を佛國國民圖書館に存し、後者は清の蔣斧が藏する所の唐寫殘本ありて光緒卅四年上海國光社に影印せられて其一斑を窺ひ得るにすぎず、唯大宋重修廣韻のみは今は儼存せり。又大宋重修本にやゝ先つと思しき別本の廣韻一種あり其編者は明ならず。初に孫愐の序あるも蔣斧藏唐韻とも同じからず、想ふに孫愐以後切韻を校増するもの嚴實文、裴務齊陳道固あること大宋重修本の首に見たれば、恐らくは此等の内何れかに屬すべし。清の顧炎武はこの編者不詳の廣韻を以て陸法言の切韻と思考し之に出發して更に三代の古韻に溯源せんとせり、顧炎武の古韻研究には五種の著述あり、詩本音、易本音、唐韻正、古音表、音論、合せて音學五書と云ふ。其研究法は廣韻を詩易の押韻によりて訂正することにより三代の古音を推知し得ると云ふにあり。詩本音易本音は、詩經と易との押韻を検出せる也、唐韻正は廣韻を訂正せる也、古音表は古音の分部を定る也、而して音論は其總論也。清代古音の研究は顧炎武に始り江永に

つがれ、江永の門下に戴震、戴震の門に王念孫段玉裁を出し、江永は古韻標準を、戴震は詩聲類及聲韻表を段玉裁は六書音均表を著し、王念孫は未だ專書を成さざるも其研究の大略は王引之の經義述聞中に紹介せられて、各一家言を立つ。之に響應して曲阜の孔廣森、歙縣の江有誥等競起して一方に旗幟を立て、古音の闡明に貢献する所多し。古韻研究に志するものは先づ顧氏の音論を讀み次に段玉裁六書音均表を讀み而して後諸家を參觀すべし。清儒研究の未だ盡さざる所は日本の漢吳音及漢吳音以外の古音、唐以前佛經の翻譯語等より明にし得べき點も少からず、太田方の漢吳音圖、山梨稻川の說文緯、大矢透氏の周代古音考等も參考の價あり。

以上文字に形音義の三面あることを述べたり、この三方面に通ずるは即ち訓詁の學に通ずる所以也、然れども之に通ずるは容易の業にあらず。單に其一面を開拓するのみにても一代の學究を要すべし。從て吾人は學者の總てが訓詁學の大家たらざるべからずとは主張せず、但學に志すものが先人の研究を等閑に付せざらんことを望む也。先進苦心の成果を利用せんことをのぞむ也。如何にして先人の成果を利用し得べきか、余は朱駿聲の說文通訓定聲を利用せられんことをすゝむる也。この書說文の文字を古韻の分部に従つて排列し每字の下先づ說文を録して本義を明にし、次に爾雅の詁訓を通し諸書の注語を博引して其派生義を明し最後に古書押韻の例をあつめて古音をさとらしむ。學者もしよく此の書を利用し得ば古典の研究に利便多かるべし

五、正 訛

既に書籍の校讐精善なるを得て、讀者訓詁に明達するときは、讀み得ざる書はなかるべき理なり。然れども校讐の資料は常に完全を期し難くして、而も文字の訛脫章句の錯亂は古書の免れざるところなれば異本の

對校を離れて訛亂を是正する方法を考へざるべからず。此事たるや勿論讀者の天分と博識とによりて自ら判斷せらるべきものにして、抽象的方法を組織し説明することは難し。試に余の經驗する所に據りて論ずれば、訛亂を是正するには先訛亂の由て起る所以を窮明する必要あり。訛亂の起る所以は書籍の變遷に伴ふて種々の場合あり。一概に書籍の變遷と云ふも其間自ら三面の變遷あり。一は記錄の材料の變遷、二は書籍形式の變遷、三は文字の變遷也。殷代の記錄は甲骨を用ひ周代は金屬を用ひ、秦漢には竹簡と縑素を併用し魏晉以後は専ら紙を用ふ此れ記錄材料變遷の大略也。簡策の制變して卷子本となり、卷子本の制變じて折本となり冊本となる是れ書籍形態變遷の大略也。殷契より古文及籀文に籀文より秦篆に、秦篆より漢隸に漢隸より一面章艸及艸書に進み一面楷體に楷體より行書に變ずるは是れ字形變遷の大略也。

簡策の書に於て誤りを生ずる第一の原因は竹簡を連綴する韋或は糸が斷絶することによりて脱簡を生ずることと之を改編するに當りて簡の順序を誤ることとなり。漢書藝文志尙書の條に

劉向以中古文校歐陽大小夏侯三家經文、酒誥脱簡一、召誥脱簡二、率簡二十五字者、脱亦二十五字、簡二十二字者、脱亦二十二字。

とあるは其一例なり。簡策を経過したる古典脱簡と錯簡のあることは豫想すべき也。每一簡の字數は書籍の種類によりて自ら定數あれば、文脈と語句の連絡を考へこの定數の倍數を他所に移易することによりて錯亂を訂正することを得。

現在世に残存せる卷子本を遍觀するに讀者誤字の右旁に正字を注して之を改め、本文の音或は義を行旁に記入せるもの多く、行旁に於て足らざるときは之を欄外に記し、或は紙背にするあり。而して後人が此種寫本に本きて轉寫せる場合には旁記の文字或は欄外の文句を本文中に記入時には背記の文までが本文に竄入す

ることあり。轉寫本或は轉寫本に淵源する板本の中、同意味の語句或は字形の近似せる文字が無意義に介在せることあるは皆この旁記の文字が竄入せるものにして凡て卷子本の時代を經過せる古典にありては此種の衍字衍文少からず。讀者宜しく前後の文脈と句法とを稽へてその竄入を刪去すべし。

早稻田大學所藏舊鈔禮記十本疏義を検するに經文注文皆疏文と同大の文字を以て記し唯經及注文の前後に一格を空にして疏文と區別せり。是れ古は必ずしも注及疏を小字双行として經文と區別せざりし明證にして此種寫本より鈔出せる轉寫本には往々經文中に注或は疏文を竄入すること少からず、莊子等の難讀なる部分には此種の竄入あるが如し。

凡そ印刷法の發明なかりし時代にありては讀者の手寫せる所にして此時代に於ける寫本の多くは原本を前に備へて之を移寫せしものならんも、亦同時に多くの副本を作る必要がある場合には一人の人が原本を朗讀して他の幾人か之を聽書せしことありと想像せらる。文選魏都賦注に劉向別錄を引きて

一人讀書、校其上下得謬誤、爲校。一人持本、

一人讀書、若怨家相對、爲讐。

とあるは、誤字を訂正するに當り見て正すと聽て正すとの二の場合あるを云ふものにして、副本を作る場合にも亦聽取して鈔寫することもあり得べき也。古書に同音字多く相誤るは此場合殊に多かるべし。之に反して見て鈔寫する場合には形似の字多く相誤るべし。而して其原本が篆字なる場合隸字なる場合、將た楷字艸書なる場合によりて、それ／＼篆字の類同、隸字の近似、楷字艸字の類似によりて相誤ることを豫想すべし。従て一文を讀んで意味文脈の通せざる場合には、其同音又は近音の字を考へて又篆隸楷艸等各體の類似する字形を考へて、其前後の文に對して尤も適切なるものを以て之を改むべき也。

印刷の起りて寫本に代るや、書籍を刻するもの往々助字を刊落して、原文の意味を晦澁に陥らしむるものあるは、古寫本と刻本とを比較するものゝ直に心付く所なり。單に刻本のみを以て古書を讀まんとするには此點も亦留意すべきなり。

以上は書籍の變遷に伴ふて起る訛誤錯亂の一斑と其是正の用意とを述べたり、然れども誤謬は必ずしも右の如き原因のみによるものにあらず。時には寫す人の錯覺によりて誤脱するあり顛倒するあり、誤衍するありて、此等は常に上下思想の連絡と句法とに注意することにより訂正し得ること多し。又時には注文により本文の誤を正し得ることあり又經文によりて注文を正し得ることもあり、殊に押韻の文にありては韻脚によりて錯亂を正し得ること多し。誤謬の種々の場合を知らんと欲すれば、兪樾古書疑義舉例を精讀すべし。形態の近似せるが爲に誤れる例は王引之の經義述聞中に列舉せり參觀すべし。

六、輯佚

以上古書校讀の法につきて略叙したれば茲に輯佚の業を説くべし。輯佚とは既に散佚せる書籍の他書に引用せられある語句を摭撫して、舊形の一斑を窺はんとするを云ふ。此業の尤も發達せるは清朝にして、甲以前之を試たるものなきにあらざれども、彼等にありては其出所を明記せず、後人をして由て出づる所を知る能はざらしむ。之に反して清儒輯佚は必ず其典據を明かにし片言をものこさざらんとする努力甚大なるものあり。清に於て初めて輯佚の業を高調せるは朱筠字笥河也乾隆中遺書を求むるの勅下るや朱筠河は翰林院貯藏永樂大典中に古書を引けるもの多きを以て之を搜輯し舊形に還元すべきを上言し、遂に四庫館の開設となれり。四庫全書中永樂大典本と稱するものは即朱笥河の計畫によりて輯められたるものにして其數二百七十部

に及べり。是に於て好古の士其風を欣び務めて輯佚の業に従ふもの多きを加ふ。殊に朱笥河に親炙せる學者余蕭客、任大椿、孫星衍の徒は此方面に於て不朽の功績をのこせり。蕭客に古經解鈎沈と稱する書あり、經注の佚せるものを輯めてこの編をなせり、蕭客の同門に江聲王鳴盛あり、江は尙書馬鄭の注を集めて今文尙書音疏を著し千載の絕學再び興るに幾し、王は馬鄭王肅の注を集めて尙書後案を作り孫星衍亦尙書古今文集疏の著あり共に尙書の研究に貢獻する所多し。任大椿に小學鈎沈の編あり、字書韻書の佚文をあつめて此編をなす其功余蕭客の古經解鈎沈に次ぐ。蓋し清朝學術の成果は、半ば輯佚の功によると云ふも過言にあらず。然り而して其輯佚の尤も大なるものを舉れば馬國翰の玉函山房輯佚書と嚴可均の全上古三代秦漢六朝文を推す。玉函山房輯佚書と經史子三部にわたりて、佚書をあつむるもの五百八十種、唯集部は與らず。集部の爲に輯佚を企てたるは嚴可均也、嚴可均の書は上古より六朝末に至る諸名家にして苟くも他書に引用さるゝものは詩文を論せず斷簡を問はず盡く其名の下に集めたるものにして無慮數千種に及ぶ。清儒の考訂に精なるものに馬嚴の書に不滿の言をなすあるも、此れ固より鴻璧の微瑕、其功績を蔽ふに足らず、蓋し一部一部書につきて更に精善なる輯佚書は枚舉に遑あらざれども、其數の多きは二家に越ゆるものなし。清儒輯佚の效績は如斯大なるも、其材料に於て闕くる所あり、若し本所傳の舊書によりて之を補ふを得ば其學に益あるもの少からざるべし。

七、結

論

余は開講の初に當り將來の漢學は支那に於て發達せる學問藝術等の歴史を組織するの目的とすべきことを述べ、後數回に亘りて、其資料の研究法と散佚せる材料を蒐集すべきことを論せり。學者もし個々の資料を

研究して其結果を地理を背景として時代の前後に従つて配列し前後の關係を説明し得れば茲に其目的は成就せらるべし。然り而して此れが排列を試に當りては先づ、支那の歴史と地理とに通ぜざるべからず。故に今結論として歴史地理の概念を得る方法を論述すべし。

支那歷代の歴史に廿四史あり、更に近年柯邵忞の新元史一を増して廿五史と稱す。もし之を精讀すれば、一史に通ずるも容易の業にあらず、況や廿五史おや。然れども之を簡約せる十八史略の類を讀むも學に益なく、近時刊行せらる東洋史の類をあさるも發明する所は多からず。余は私に謂らく、廿五史は通讀するに及ばず唯必要な部分を選びて精讀すべし。即儒學史を研究する者は藝文志經籍志と儒林傳道學傳を精讀し必要に應じ列傳中の二三を讀むべし、文學史を研究せんとする人は儒林傳に換るに文苑傳を以てすべし、經濟史を研めんとすれば食貨志の類を摘出して精讀すべし。かくの如く選擇して熟讀するときは全部を粗漏通讀するにまさる、是れ勞少なくして功多き法也。もし廿五史を自ら購ふ能はざれば圖書館等につき必要な部分を手寫するも難事にあらず。かくて史を讀み終らば馬端臨の文獻通考を讀むべし、此書亦浩瀚全篇を通讀するを要せず、學者宜しく其目次を検して適宜取捨すべし。

地理の書亦汗牛充棟、通志府縣志の類一一數へ來れば吾輩を代るも限りなからむ。余の鄙見を以てすれば地理書は多く見るを要せず。唯顧祖禹の讀史方輿紀要を讀むべし。此書卷帙亦大、通讀に易からず學者先づ其歷代州域形勢を讀み次に各地の總論を讀むべし、其地名を列舉して細注を加ふる部分は必ずしも讀まず、もし地名の方處を詳にせざるものに會すれば李申耆地理志韻を編檢し而して後記要を披見すべし、紀要の足らざるあるときは初めて他書の尋檢すべし。是れ地理を專攻せざるもの、地理書を讀む秘訣也。地理書を讀む亦地圖を參看するを要す、支那歷代地理の沿革を知るには楊守敬の輿地圖尤も可。

以上論する所を要約すれば、凡て歴史的研究は箇々の文献を精密に攻究したる後、之を地理を背景とし時代の線索によりて連絡するにありと云ふにすぎず。然れども之は寧ろ理想論に近く實行に易からず。尤も實行し易き方法は先づ自れの研究せんと志す方面の先進の著述を一讀し、其人名、地名、書名の熟知せざるものに遇ふ毎に、之を廿四史の列傳、方輿紀要、及び四庫全書提要に參觀して、先進の著述に誤なきや否やを考へ、かくして其發達の概要を會得したる後、特種材料を研究して既得の知識を進化せしむるを便とす。若し支那文學史を研究せんとすれば王夢曾の中國文學史、經學史を究めんと欲すれば皮錫瑞の經學歷史など好入門書なるべし。

「于」「於」兩字の古音に就いて

財 津 愛 象

一、「詩」中に於ける兩字の用法

于字の詩中に用ひらるゝものは、(一)純粹の歎字として、(二)介字として、(三)於是と訓して歎字的に用ひらるゝものゝ三種である。

(一)純粹の歎字として用ひらるゝもの

于字は單獨に用ひらるゝことなくして、常に嗟字と連用せらる。

(イ)于嗟(麟趾)于嗟麟兮